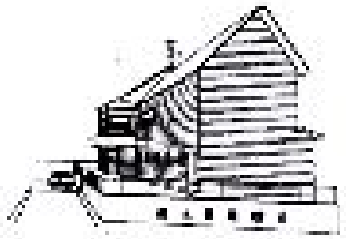
＜復活の出来事＞

先週も共に御言葉から学びましたが、イエス様は本当によみがえったのでしょうか。かつて私たちはそのように教えられ、そう信じ、信仰を頂いたと思います。しかし本当にやはり十字架上で殺され、葬られ、その後よみがえったのでしょうか。教会生活も長くなってきますと、このようなことは、新鮮な問いという性格を失っていき、時として“事実は別としてそう聖書は証しをしているのだ”と思ってはいないでしょうか。キリスト教がいかに正しいかを示す為に、はじめのころの教会が、打ち合わせて作った話なのだ、とも考えられました。しかし、四つの福音書が記録している事実は、視点という以上に、事実経過に違うところがあります。すなわち、打ち合わせた話だったとしたら、皆同じ経過で書かれるに違いない、ということになります。福音書の記録は、曖昧さを証明することではなく、作り話ではなかったことを示しているということになります。また“これは信仰者の物語”、神様なのだから、なんでもできないことはないと、真剣に理解した人々もありました。しかし、このように理解すると十字架も“神様の殺されるふりだ”ということになります。私たちの理解をもう一度思い出してみましょう。どんなに大きな出来事だったにしろ、歴史上の出来事だったのです。この方を信じる信仰の価値がここにあるのです。私たちの信仰が一層価値を帯びるために“このことは事実でなければ困る”ということであって、“事実にしよう”としているのではありません。今朝の個所は、聖書に数限りなく記録されている失敗の出来事です。昔カインはアベルを殺してしまいました。武器というようなもののまだない頃です。エソウはヤコブとのやりとりの中で、大きな失敗をしてしまいました。“弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ”と言うことにしよう（２８：１３）、という大きな、歴史的な失敗をしてしまいます。今も聖書を読む者にこのことは知られるのです（２８：１５）。画策を無効にしたのは“事実”でした。信仰者と教会の歩みも、もし何か、利益のために画策をしたとしたら、事実がこれを永遠に暴き続けることでしょう。正しいということは作り上げられるものではなく、認められることなのです。永遠の命といいますが、信仰の価値のためにあるのではなく、“永遠の命”があるから、信仰者の喜びになるのです。パウロは“福音を恥としない”、“愚かさを誇ろう”といいました。イースターに聖書は真実を皆に問うのです。

週　報

２００９年　４月　１９日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☏054-345-4070　E-Mail grace@big.jp